

名詞句の“自由拡充”が抱える問題とその根源

山泉 実 (YAMAIZUMI Minoru) 大阪大学

本発表は名詞句の自由拡充といわれる現象の考察を通して、言語は話し手の思考・命題をコード化するためのものであるとする立場を批判し、言語は言語無しでも原理的に可能な意図明示-推論コミュニケーションを強化することが本来の機能で、話し手にとっては聞き手の心的状態を操作するためのもの、聞き手にとっては話し手の意図を読む手がかりだとする立場（OIC の立場、Scott-Phillips 2015）を擁護する。

西山・峯島（2006 他）は名詞句の自由拡充について以下の提案をしている。

I. 叙述名詞句は自由拡充できない。たとえば、(1)の例で **B** の叙述名詞句「バス」は、[中野駅行きの]を自由拡充で補って理解してもらえない。そのように自由拡充すれば文が真になって発話の関連性が高まるにも関わらずできない。

II. 他の名詞句は自由拡充できる。一方、(1)の **A** の指示的名詞句「バス」は、[中野駅行きの]を自由拡充で補って理解してもらえる。

(1) (AさんとBさんが中野駅行きのバスを待っているときに) A: あ、バスが来た。

B:(そのバスが中野駅行きではなく野方行きだと気付いて) #いや、あれはバスではない。

しかし、叙述名詞句以外の述語名詞句にも、次例のように自由拡充で[中野駅行きの]などを補って理解してもらえないものがある。次例が偽と感じられるのはそのためであろう。

(2) (Aは中野行きのバスを待ちながら時計で4分間測った。その間に野方行きのバスと中野駅行きのバスだけが来た) 4分以内に来たのはバスではなかった。

一層根本的な問題があるのは、名詞句が自由拡充可能であるとされる場合である。

(3) (太郎は、飼っている猫が最近姿を見せないことに気づいて、花子に言った。)

a. 猫がどこかへ行ってしまった。(この発話を花子は下のように拡充して理解する。)

b. 《[太郎が飼っている] 猫がどこかへ行ってしまった》(峯島 2013: 538)

第一に、彼らは、自由拡充の後に拡充された概念への指示対象の付与がなされるという発話解釈プロセスを想定する（峯島 2013: 542, 543）。しかし、名詞句の表す概念をどう拡充するか、つまり何を付け足すかは、意図された指示対象がわかっていないとできない。第

二に、なおも自由拡充が必要だと考えても、どのような概念を付け足せばよいのかが不明であるという問題がある。もし花子はその猫について、太郎が飼っているということ以外にもいろいろなことを知っている場合、何が[]に付け足されるのだろうか。[]は表意の一部であるから、話し手が伝えようと意図したものでなければならないのに、付け足すものを決定できない。従って私の考えでは自由拡充の可否を論じること自体に意義がない。

本発表では、名詞句の自由拡充とされる現象について、指示参照ファイル理論 (Reference File Theory、Yamaizumi 2019) に基づいて新たな分析を提示する。この理論は、関連性理論 (スペルベル・ウィルソン 1995/1999) に基づく言語進化論 (Scott-Phillips 2015) の言語観と、ジャッケンドフ (2012/2019) の概念主義的意味観を組み合わせ、後者の指示参照ファイル (reference file、大雑把に言うと指示対象に対応する心的表象、以下 RF) という概念を取り入れたものである。この理論は、意義と意味 (フレーゲ 1892/2013) のような区別を設けず、名詞句の意味とは話し手が聞き手の心に想定した RF に他ならないと主張する。名詞句の理解は、話し手が意図したような RF に聞き手が語用論的原理に従って心的にアクセスすることで成功する。このような言語観の下では、名詞句の“自由拡充”にまつわる上記の問題は生じない。自由拡充で加わったとされる情報はアクセスされた RF に既に入っているからである。

- 参考文献** ジャッケンドフ, R. (大堀壽夫・貝森有祐・山泉実訳) (2012/2019). 『意味と思考の取扱いガイド』東京：岩波書店。
- スペルベル, D.・ウィルソン, D. (内田聖二他訳) (1995/1999). 『関連性理論：伝達と認知』(第2版) 東京：研究社
- 西山佑司・峯島宏次 (2006). 「叙述名詞句と語用論的解釈—自由拡充プロセスにたいする意味論的制約をめぐる—」 飯田隆 編『西洋精神史における言語と言語観』 pp.21-50. 東京：慶應義塾大学言語文化研究所。
- フレーゲ, ゴットロープ. (野本和幸訳) (1892/2013). 「意義と意味について」松坂陽一編訳。『言語哲学重要論文集』 pp. 5-58. 東京：春秋社。
- 峯島宏次 (2013). 「自由拡充をどのように制約するか」 西山佑司 編著。『名詞句の世界—その意味と解釈の神秘に迫る—』 pp. 513-557. 東京：ひつじ書房。
- Nishiyama, Y. and Mineshima, K. (2007). Property expressions and the semantics-pragmatics interface. In P. Cap, and J. Nijakowska (eds.), *Current Trends in Pragmatics*. Newcastle-upon-Tyne: Cambridge Scholars Press, 130-151.
- Nishiyama, Y. and Mineshima, K. (2010). Free enrichment and the over-generation problem, In Wałaszewska, M. et al. (eds.), *In the Mind and across Minds*. Newcastle-upon-Tyne: Cambridge Scholars Publishing, 22-42.
- Scott-Phillips, T. (2015). *Speaking our minds: Why human communication is different, and how language evolved to make it special*. Basingstoke: Palgrave MacMillan.
- Yamaizumi, M. (2019) A cognitive-pragmatic account of specificational sentences. Paper read at the 15th International Cognitive Linguistics Conference.